

論 説

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする 中国政治の統治文化(1)

夏 剛

1 . 「下海」^{フーム}熱：「文革」後の政治 経済の転換

『文学』（岩波書店）1989年3月号に掲載した『「文革」後の中国文学と日本の戦後文学相互参照の試み』は謀らずも、其の5年前に始まった筆者の20世紀日・中文学の研究・評論の決算と成った。論文が世に出た直後の天安門事件で文学の限界を痛感した結果、研究領域を比較文学から比較文化に移し、言語・風習乃至政治・経済・社会・歴史の多角から両国の異同を掘り下げる方向性が出来た。

其の論考の範囲は日本の1945～55年、中国の76～86年に絞った。敗戦11年目の『経済白書』の「もはや“戦後”ではない」宣言ほど明確でないにせよ、「文革」終結10年後の“文革”後から「後“文革”」^{ポスト}への移行は顕著だ。改革・開放の急先鋒 胡耀邦総書記が87年初めに失脚した一幕は、中国が戦後日本並みに経済成長に専念する事の困難さを示したが、彼が其の前に新時代の転形を形容した「脱毛」（脱皮）は、字面が含む隠れ味の脱毛沢東と共に不可逆の帰趨だ¹⁾。

官僚・文化人・^{スポーツ}体育選手等の経済界への転職を言う流行語の「下海」²⁾に、其の変化は端的に現われる。20世紀前半に生まれた此の俗語は、素人役者の^{フロ}職業入りを海へ出る事に譬えるのが原義だ³⁾。未知の舞台に投身し可能性を追求する「下海」は、「風険」（不確実な危険）^{リスク}を冒す点で、全国最大の経済特区として88年に新設した海南省への転職・移住（俗称は地名に引っ掛けた「下海」⁴⁾）^{フーム}熱や、同時期に急増した留学生や経済難民の海外進出と重なる。此等の行動は其々改革・開放の域に入るが、最後の方の美称 「世界大串聯」は各地に赴き連携を求める紅衛兵の「串聯」^{もじ}を擬った物だ⁵⁾。其の毛沢東時代からの反転と共産党時代以前の「下海」の変形復活は、「脱毛」の時流を映し出す。

87, 89年の「反^{フルジョア}資産階級自由化」、天安門事件は「脱毛」の陣痛とも思えるが、「政治風波」は字・義とも改革・開放の「風険」^{リスク}に暗合する。「反革命動乱」の断罪に代った此の^{ぼかし}臙化表現

は、中性的な「学潮」(学生運動)の呼称への許容と共に、中国流の糊塗工作⁶⁾の好例だ。文芸技法の「淡化」(稀釈化)が政治手法に転用された事⁷⁾は、中国の政治と文芸の同根性を窺わせるが、発信源の文学はやがて稀薄化・退潮を強いられた。

上記の論考で“文革”前世代」と分類した文学者の中で、85年に中国作家協会副主席に選ばれた3人の其の後の歩みは、其々「淡化」・「世界大串聯」・「下海」に見える。武力鎮圧後に文化相を解任された王蒙は、現実への超然たる諷刺を含む創作に専念した。一党独裁への批判で87年に党籍を剥奪された劉賓雁は、今度は米国に亡命し体制と訣別した。蘇州文人の美意識で名高い陸文夫は政治と距離を保ちつつ、マルクス主義への眷恋を創作の種にした同世代の小説家・張賢亮の後を追う様に、後に会社経営に乗り出した⁸⁾。

「文革」後文学の最初の10年は、「傷痕・反思(反省)・尋根(ルーツ探し)」の3期に分けられる。天安門事件で新たな傷痕が出来たが、其を癒すのは前回の精神の昇華と対蹠の商魂だ。筆者は胡耀邦・劉賓雁批判の激震の最中、創作の自由を抑える政治規制と表現を腐蝕する商業化の恐さを警告し、文学の悲観的な見通しを示した⁹⁾が、予言は遂に現実と成った。両面の大敵に由る破壊の例は、作家協会主席・巴金の「文革博物館」の構想の頓挫¹⁰⁾、氏が主宰し其の娘が仕切る名門文学誌・『收穫』の財政難に因る廃刊危機の頻発だ。

但し、禍福は糾える縄の如し。武力鎮圧が招いた反発は逆に歴史の前進を加速し、完全引退の鄧小平の「南巡」講話(1992)は超法規的ながら改革・開放の再点火に成功した。事実上の一党独裁の維持は結果的に、亜細亜4「小龍」の中の韓国・台湾・新嘉坡^{シンガポール}の様な独裁開発型の高成長を可能にした。文学の低調は同じ傷痕 商魂の変貌を遂げた昭和30年代以降の日本と一緒にだが、社会がより求める経済の繁栄の代償とも割り切れる。

前述論文で明治維新と「百日維新」(1898)以降の両国間の30年程の発展時差を指摘したが、中国は光緒帝の失脚で失敗^{しくじ}った戊戌変法以来の百年間、力関係が逆転した抗日戦争勝利後の一時期を除いて、日本を近代化の手本と競争相手にして来た。日本の昇竜めく成長は儒教的な資本主義の成功に帰せ、其の勝因には「儒・教」の文字通りの道徳・教育に対する重視、「資本・主義」の二元に対応する『論語』+算盤の二刀流が大きい。

毛沢東時代の末期は道徳・教育とも崩壊し、資本主義に対する完全否定も手伝って、貧困な社会主義への暴走が政治・経済を破綻させ、物心両面の劣化をもたらした。「文革」終了時の中国は31年前の敗戦時の日本の様な焼け野原こそ無いが、負の遺産と内面の廢墟を抱える^{ひど}非道い状況だった。60年の安保闘争・池田内閣の国民所得倍増計画宣言と89年の天安門事件・92年の鄧小平「南巡」との間隔¹¹⁾も、上記の発展時差と合致する。

安保動乱の数ヵ月後に世に出た国民所得(国民総生産)10年倍増計画は、民心修復・政権維持の狙いを秘めていた¹²⁾。「文革」後の「信仰(共産党への信任)危機」が強まる80年代に中共が打ち出した国民総生産倍増、倍増計画¹³⁾、人心の離散を招いた天安門事件の数ヵ月後

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化(1)(夏)

に鄧が踏み切った完全引退・権力譲渡も、政治的な意図に由る政治から経済への転換だ。共産党中国は同時代の日本と違って「経済動物」に成り切れぬが、経済が政治と対等な両輪たり得る事は、2代目の領袖・鄧の特質と共に、彼を含む実務派が優位を占める「文革」前の56年体制¹⁴⁾や、其の崩壊後も彼を乱世收拾の切札として温存し活用した「政治動物」・毛沢東の深謀¹⁵⁾が示した様な、中共の現実主義が根底に有る。

2. 「儒商」の新概念：改革・開放時代の『論語』+算盤の結合

毛と鄧は価値の重点の置き方が異なったが、社会主義制度下の繁栄への追求は同じだ。社会主義・繁栄の理想・現実の二極は、もはや「文革」ではない80年代末に流行り出した「儒商」¹⁶⁾に同居する。儒教的な徳徳や素養を持つ商売・商人に言う此の新語は、「日本資本主義の父」・渋沢栄一の「片手に『論語』、片手に算盤」¹⁷⁾に通じる。周恩来と鄧小平は「文革」の極左派から其々「当代の大儒」、「資本主義の道を歩む実権派」と断罪されたが、其の儒・資本主義も毛沢東以後の中国の「双軌」(複線)の一部に成った。

『論語』・算盤即ち義・利の両手・二極は、「手心・手背」(掌・手の甲)の如く表裏一体なり得る。「君子喩於義、小人喩於利」(君子は義に明るく、小人は利に明るい)と孔子は言ったが、日本語の「聖人君子」と違う中国語の「正人君子」が示す様に、彼の儒教の始祖にも人間臭い俗物性が多々有った。「聞韶楽、三月不知肉味」(韶の音楽を聞いて、[感動の余り]3ヶ月も肉の旨味も判らなかつた)との賛嘆は、文化的な香りの深層に肉が価値の尺度と成る発想を隠し持つ。同じ『論語・述而』の「自行束脩以上、吾未嘗無誨焉」(乾し肉1束を持って来た以上、どんな人でも私は教えなかつた事は無い)は、謝礼の肉と知識との取引を意味する。感情の内に勘定を仕組んだ孔子の精神構造は、「季氏」篇の「益者三友、損者三友」(有益な友達が3種、有害な友達が3種)、「益者三楽、損者三楽」(有益な楽しみが3種、有害な楽しみが3種)の価値判断にも見て取れる。

儒教の此の經典は世間の定見と逆に、実に多くの算盤を内蔵している。例えば、「子張学干禄。子曰：“……言寡尤，行寡悔，禄在其中矣。”」(子張は俸禄を取る要領を学ぼうとした。孔子曰く、「(略)言葉に非が寡なく、行動に後悔が寡なければ、俸禄は自ずと得られよう。」)の件で、師弟とも俸禄への追求を否定しない。「子貢曰：“有美玉於斯，韞匱而蔵諸？求善賈而沽諸？”子曰：“沽之哉，沽之哉，我待賈者也。”」(子貢曰く、「此処に美玉が有るとします。匱にしまい込んで置くべきでしょうか、真価が判る善き商人を探して売るべきでしょうか？」孔子曰く、「売ろうよ、売ろうよ、私なら買い手を待つのだ。」)には、有利な時機・条件で自分を売り込む打算・魂胆が見え隠れする。

竹内実の「華人」の定義には漢字の示す概念で思考する事が有り¹⁸⁾、幸田露伴は中国人の心

性の研究材料に俗諺を挙げた¹⁹⁾が、中国人の発想や行動文法を左右する中国の言葉や熟語には、和製漢語の「商魂」に因んで言えば、商・魂の渾然一体の観が強い。成語の「待價而沽」(良い買値の提示を待って売る。転じて、良い待遇の提示を待って自分を売り出す)の由来と成る上記の孔子語録の中の同音の「賈・沽」を例にすれば、賢者が学徳を隠して銜わぬ事に譬える「良賈深蔵若虚」(良賈は深く蔵して虚しきが若し)の様に、商を以て魂を表わし計算が道德の物差しを成す表現が多い。『史記・老子伝』に出た此の成句と、下の「君子盛徳容貌若愚」(君子は人徳が優れても[顯示せぬ故]外見は患者の若し)とは、内容的に商・儒(魂)の対に成る。

丸百年前に他界した思想家・教育家の福沢諭吉の名著に絡んで言えば、中国では学問の勤めは伝統的に発達しており、其の特質には学徳志向と功利主義の一体化が有る。人口に膾炙する伝・宋真宗(趙恒)の『勸学詩』は、「書中自有顔如玉」(書物の中には自ずと美玉の如き麗人の顔が有る[学業に励めば何れ美人と結ばれる]),「書中自有千種粟」(書物の中には自ずと千種類の粟が有る[学業に励めば何れ豊富な俸禄が獲れる]),「書中自有黄金屋」(書物の中には自ずと黄金の家屋が有る[学業に励めば何れ豪邸に住める]),「書中車馬多如簇」(書物の中には自ずと馬車が多く群れを成すが如し[学業に励めば何れ顯貴の徴の馬車の群れを所有できる])と言う。国民平等・独立自尊を謳う『学問の勤め』は、冒頭で「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」と宣言したが、中国では「吃得苦中苦,正為人上人」の発想が今だに根強い。

勸善懲悪を標榜する大衆小説家・曲亭馬琴の『椿説弓張月』(1811)の台詞には、「世の常言に、苦中の苦を喫し得て方に人の上の人と成るべしと云へり」と有る。其の熟語も「常言」も日本語から消えたが、中国の「常言」(世に好く言われる常識)を重視したい。『学問の勤め』の思想啓蒙の役割は明治以降には続かなかつたが、昔の中国の児童啓蒙教材『三字経』²⁰⁾、『千字文』²¹⁾、『名賢集』²²⁾、『弟子規』²³⁾、『神童詩』²⁴⁾、『小兒語』²⁵⁾、『増広賢文』²⁶⁾等は、時代や体制に拘らず不易の影響を持つ。

3. 「蒙学課本」に見る中国的な思考 - 志向の陰陽混成の糾纏構造

此等の文献は人生開眼の契機として、中国人の思考 - 志向に色濃く投影して来たが、此の文脈の中で注目すべき傾向は数点有る。

1. 強烈な立志出世願望の宣揚。

例えば、34首の五絶詩から成る『神童詩』の最初の14首の題は『勸学』の一色で、2首目はか
斯く云う。「少小須勤学,文章可立身。満朝朱紫貴,尽是読書人。」(幼少から勉学に励むべきで、文章を以て身が立てられる。朱・紫[4~5品・3品の官服]を着る朝廷の権貴は、悉く

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化(1)(夏)

知識人なのだ。)『学問の勤め』の刊行終了の1876年に開校した札幌学校の米国人教師は、翌年に日本を去る際“Boys, be ambition”と激励の名言を残したが、大志を抱けと少年たちに唱え続ける中国の家庭・学校の教育は、米国人に勝つとも劣らぬ「個人英雄主義」の基盤を造って来た。

2. 自強意識と富強意識の連結・連動。

『神童詩』の「将相本無種，男兒当自強」(將軍・宰相は元より世襲する者ではなく，男兒は自ら励むべきだ)は『名賢集』にも有るが，『神童詩』の最後の15首の『早春』……『除夜』の苦学 収穫の精神的な色彩の強さに対して，「朱紫貴」に露われた権力・財力への渴望は『名賢集』『増広賢文』の中で前面に出る。両方に入る「人貧志短，馬瘦毛長」(馬は瘦せれば毛が長く[貧相に見え]，人は貧しければ志が卑しく成る[貧すれば鈍する])や，後者の「馬行無力皆因瘦，人不風流只為貧」(馬に氣力が無いのは瘦せの為で，人に生彩が無いのは貧困の故だ)の様な，向上心と経済力の窮乏に対する蔑視が随所見られる。

3. 自己本位・利益追求の利己主義の一部の露出。

戦国初期に一頃風靡した哲学者・楊朱の言論が殆ど残らぬのは，孟子等に貶された「重己」(己れを重んじる)，「取為我」(私の為を旨とする)，「拔一毛而利天下不為也」(一本の毛を抜いて天下を利す事も為さぬ)等の「極端個人主義」(毛沢東時代の断罪用語)が嫌われた所為と思える²⁷⁾が，『名賢集』『増広賢文』に出た「人為財死，鳥為食亡」(鳥は餌の為に亡び，[同様に]人は財の為に死ぬ)や，後者の中の「人無横財不富，馬無夜草不肥」(馬は夜食が無ければ肥えず，[同様に]人は[不正な]副収入が無ければ富まぬ)は，蓄財・副業や横領・汚職への暴走の根拠にも用いる露悪主義の代表格だ。

4. 清・濁の混在，高潔・強韌への同時追求。

極端な個人主義への排斥は個人主義に対する容認の裏返しであり，楊朱の犯さず犯されず主義は今も中国の社会生活や外交等で生きている。『名賢集』の「量小非君子，無毒不丈夫」(器量が小さければ君子に非ず，非情さが無ければ男子ではない)，『増広賢文』の「人善被人欺，馬善被人騎」(馬は大人しければ人に騎られ，[同様に]人はお人好しだと他人に舐められる)は，綺麗事ばかりではない。先賢の語録と民間の処世哲学の俗諺から成る『名賢集』²⁸⁾は，大人の風格と対人の機微を説く物だ。此の2つの文献や『小児語』は修身指南の『弟子規』と違って，成人の「複雑な成熟した情欲」(滅亡体験から育まれた中華民族の叡知を形容した武田泰淳の言²⁹⁾)に満ちている。

5. 論理・構造の混沌・飛躍。

教養の育成と歴史の教育を主眼とする『三字経』『千字文』の理路整然に対して，『名賢集』『増広賢文』は雑多な語録の恣意の羅列の観が強い。例えば，「人為財死，鳥為食亡」と上の句の「順天者存，逆天者亡」(天に順う者は存続し，天に逆らう者は滅亡する)，下の句の「得人

一牛，還人一馬」(人から一頭の牛を得れば，[より価値の高い]一匹の馬を返さねば成らぬ)との間には，直接な関連が無い。但し，似た形態を持つ『論語』と同じく，無秩序・非連続の中の秩序・連続も見て取れる。「人為財死，鳥為食亡」を一種の天理と見る場合は，「順天者存，逆天者亡」との相関が浮上して来る。

6. 矛盾する命題の同居。

『名賢集』の「財高語壯，勢大欺人」(財力が強ければ鼻息が荒く成りがちで，勢力が大きければ人を舐めがちだ)は，資産家・権力者の発言への圧迫・不快を表わすが，『増広賢文』の「有錢道真語，無錢語不真」(金持ちは[余裕が有る故]本当の事を言い，貧乏人は[憚りが多い故]偽りの事を言う)は，財力を持つ者の発言を真実として肯定する。『増広賢文』の「明知山有虎，偏向虎山行」(山に虎が居るのを承知で，敢えて虎の山[危険]に向う)は進取精神を唱え，「近来学得烏龜法，得縮頭時且縮頭」(近来亀の流儀を学び取り，首を引っ込めるべき時は首を引っ込める)は韜晦を勧める。其処から読み取れるのは，中国人の価値判断の相対性や使い分け，二極の相剋相生・「相補相成」(相互補完)の対立・統一，雅と俗(上品と下品)，淑やかな恬淡^{しと}と戦闘的な激情……を一切合切(財)包容してしまう懐の深さだ。

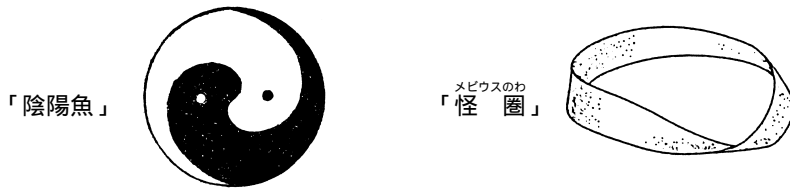
7. 命題内部の自己撞着。

善悪・是非・美醜・損益・利徳の相互内包と価値尺度の複線は，命題の内部にも現われる。『名賢集』『増広賢文』の両方に出た「黄金未為貴，安樂值錢多」(黄金は必ず貴重ではなく，安樂こそ金銭に換算すれば価値が高い)，『増広賢文』の「錢財如糞土，仁義值千金」(錢・財は糞土の如く見るべきで，仁義こそ千金に値する)は，金銭至上主義を否定しつつ金銭を至上の物差しに用いる。禁欲を以て大欲を目指す「大欲は無欲に似たり」³⁰⁾等の逆説的な正論と通じて，多くの金言は和製漢語の「鷹揚」の字面と語義に吻合する様に，悠然たる螺旋状の昇華・下降が見られる。

此の一連の啓蒙学習の指針から，中国思想の複雑 - 単純系の特色が幾つか見える。

a. 黒・白が内包し合う「陰陽魚」・糾纏・「怪圈」(メビウスの環)構造。

大雑把に映りがちの中国思想は，陰陽原理の祖型「陰陽魚」の図式³¹⁾に帰着でき，紙一重の差で常に変幻・転形し得る虚実皮膜の融通無碍も持つ。「将相本無種」と同じく『史記』が出典の「吉凶(禍福)は糾纏の如し」に即して言えば，糾纏(2筋，3筋縫り合わせた縄)めく「纏繞」(纏^{まと}い付く。絡み合う)状の重層が多い。「黒猫・白猫」(鄧小平の「黒い猫でも白い猫でも，鼠が捕れる猫が好い猫だ」)，「一切向前看・一切向錢看」(共産党の標語の「“文革”の怨念に拘らず」一切合切前向きに」と民衆の本音の「一切合財金儲けを目指す」³²⁾)，「一(個)国(家)両(種)制(度)」³³⁾(大陸の社会主義と香港の資本主義)等の複線は，天衣無縫(無邪気+完璧)に隣り合う。



b. 冷静な現実主義と強固な主我志向。

中国人は駒田信二が指摘した様に、是非や善悪の判断に当って両者を対等的に眺める傾向が有る³⁴⁾。児童啓蒙教材に「人為財死、鳥為食亡」「財高語壯」等が善悪不明の形で登場したのも、等距離の複眼の現われである。囲碁テレビ中継の対局者の配置は、日本では上一下、中国・韓国では左一右と成る。日本式は観客の感情が移入し易い流儀だとする見方³⁵⁾は、日本人の過剰な情緒や判官贔屓の傾向を言い当てた。中国式は文字通りの「客観」だが、対局者から完全に独立した主我堅持の立場は「主観」の要素も強い。日本囲碁の高潔な芸道志向と対照的な中・韓囲碁の強靱な実利主義も、主我的な現実主義の一例か。

c. 情理・理想を尊ぶ思考 - 志向の優位。

中国人は駒田信二の直観の通り、善悪の対の二極から其々又善と悪を見出し、其の二極から其々更に善と悪を見出して行く習性を持つ³⁶⁾が、左様な追求は永遠に完結しないとは限らぬ。中国的な対立・統一は状況の変化に因り主・従の転換が有り得るが、主従の対の存在自体は不易な物だ。一刀両断が無理な乱麻や複線の中にも「主線」(主たる糸口。本筋)が有り、複眼の場合でも常に何方の片方が主眼と成るわけだ。『名賢集』『増広賢文』等には赤誠と赤裸々、克己と利己、富貴と風紀……等の二極が同居するが、先発の黒が不利を負う囲碁の規則が象徴する様に、善善悪悪、是是非非の価値判断が根底を成す。俗物的な本音はあくまでも傍流に過ぎず、主流たる「孔孟之道」の建前の優位は明らかだ。

4. 儒教と中国の理念・情念の多元・多様・多角・多彩・多岐の複雑系

多くの日本人が抱く「伝統の中国＝儒教・礼儀の邦」の固定観念は、物事の単純化・理想化を好む思考様式に由来したろうが、実態は「套盒」(入れ子)風の複雑系だ。中国思想は儒・道・陰陽・法・名・墨・縦横・雑・農の9流を始め、数々の流派や多元・多様・多角・多彩・多岐の特徴を持つ。同じ「儒」でも、孔子の儒教(『辞海』の「儒教」の定義は「即“孔教”」)と彼を尊崇した後世の儒家と大別でき、後者は『韓非子・顕学』の「有子張之儒、有子思之儒、有顔氏之儒、有孟氏(孟子)之儒、有漆雕氏之儒、有仲良氏之儒、有孫氏(荀子)之儒、有栾正氏之儒」の通り、遠い昔にも儒家8派に分かれた。「外儒内道」³⁷⁾の類の複眼的な分析でも、込み入った多重基準を包括し切れない。

「入世」(世に進出・関与すること)と「出世」(世から退散・隠遁すること)は、儒教(家)の有為と道教(家)の無為の対に見えるが、孔子の「賢者避世」(賢者は[動乱の際は]世を避ける)の警句の通り、儒教(家)も乱世なら「出世」、平時なら「入世」と使い分ける。『大学』の「修身、齊家、治國、平天下」(身を修め、家を整え、国を治め、天下を平定させる)は、儒家の不易な理想として継承されて来たが、孟子の「窮則独善其身、達則兼善天下」(窮乏の時は我が身だけを善くし、出世すれば天下の人々をも善くする)の様な、現実と理想、保身と進取の二段構えが深層に有る。孔子の南容(妻の叔父)評「邦有道不廢、邦無道免於刑戮」(国に道^{どう}が有る時は登用され、道^{どう}が無い時にも処刑が免れられる)も、「窮・達」の両方とも凌げる適応力・競争力への称賛だ。

中国の長年の悲願なる世界貿易機関への加盟は、好く「入世」(「加入世界貿易組織」の縮語)で表わすが、「入世・出世」の変幻は中国の政治・外交でも屢々見られる。天安門事件後の国際社会での孤立化を乗り切るべく、鄧小平が命じた「韜光養晦、決不当頭」(忍耐・韜晦に徹し、決して先頭に立たぬ)の心得は、前出の「近来学得烏龜法、得縮頭時且縮頭」を踏襲した陰・柔の自重だ。失脚の故に失意した赤軍時代の毛沢東の仮名「楊引之」は、引退・隠遁を含む「引」+「揚^{ヤン}」と同音の「楊^{ヤン}」³⁸⁾の合成だ。抗日戦争後の転戦中の仮名・「李得勝^{リードオシヨ}」は、「離得勝^{リードオシヨ}」(離れて勝利を得る)の寓意だが、「以退為進」(退を以て進と為す)の両者とも、「出世 入世」の二刀流に他ならない。

孔子の「言寡尤、行寡悔、禄在其中矣」が出た『論語』の篇名は「為政」だが、『孟子』の冒頭の「孟子見梁惠王」(孟子が梁の惠王に面会した)は、政治に深く関与した儒家の為政志向³⁹⁾を浮き彫りにした。王の「叟不遠千里而來、亦将有以利吾国乎？」(先生は千里もの遠路を厭わず来てくれたのは、[他の人々と同じく]我が国に有益な提言をしてくれる事か)は、為政者の「極端功利主義」の発露と言えるが、孟子の「王何必言利!亦有仁義而已矣」(王は何故利ばかり言うのだろう。仁義だけ行なえば好いのだ)は、一見正反対の高邁な主張の様だが、至高の理を利の実現の近道とする逆説に捉えれば、両者の遣り取りは同工異曲の物とも思える。

管子・荀子の王道志向+市場原理の「双管齊下」(複線の同時進行)には、其の儒・商の両極は巧く融合している。儒家の中で最も影響力の強い孟子と荀子は、其々『論語』と算盤に力点に置いた観が有るが、『孟子・梁惠王上』の第2段落の「先利後義」に対する批判⁴⁰⁾は、其の約60年後の荀子の「先義後利」と共通する。義の先行で利が自然に附いて来るとは、利への追求を最初から放棄する事を意味しない。同じ「梁惠王上」に出た「樂歲終身飽、凶年免於死亡」(豊年には長く飽き足り、凶年には死亡を免れる)は、孔子の「邦有道不廢、邦無道免於刑戮」と重なるが、民衆の安全・安楽を指標とする其の治世の理想の実現の為に、孟子は「不違農時」(農時^{たが}を違えず)等の実務の提言をした。

『名賢集』に出た「為富不仁矣、為仁不富矣」(富まそうとすれば仁に^{かな}適わず、仁を成そうとすれば^と富めぬ)は、『孟子』で引かれた陽虎(陽貨。魯の季氏の家臣)の言葉だ。『論語・陽貨』の記載の通り、孔子は面会を謝絶した上で、豚を贈られたお礼の挨拶もわざと相手の留守を狙って行った程、主家を抑えて国政を握る此の男を毛嫌いした⁴¹⁾。季氏も家老の分際で魯の君の先祖・周公より富裕である事や、他国への武力侵攻等に因って、孔子の酷評を浴びた⁴²⁾。季氏の富みを増やす為に租税の取り立てを手助けした冉求への痛恨と合わせて、其の一味に対して「鳴鼓而攻之可也」(太鼓を鳴らして攻める)と弟子に呼び掛けたが、悪との対決を辞さぬ正義感と共に、孔子の戦闘的な一面も垣間見れる。

陽虎の「為富不仁矣、為仁不富矣」は、租税の取り立ての際に利益と人情が両立しない意も有る。可も不可も無く此を引いた孟子の立場は、「無毒不丈夫」に対する『名賢集』の首肯と合致する。『論語・子罕』の最初の句「子罕言利與命與仁」(孔子は滅多に利益・運命・仁義の事を言わなかった)は、前半は孟子の「王何必言利」と重なるが、孟子が力説した仁義も余り語るまいのは、範囲が広過ぎて要約し^{にく}難い事も一因か。運命の話題に触れぬのは神秘的故の忌憚と考えられるが、利益への言及が少ないのは下品を嫌う気分よりも、微妙な事柄につき誤解を避けたい思慮も有ろう。陽虎の例の命題は富と仁の両立を不可能とする論拠に好く用いられるが、仁義無き富みには否定的な孔子は仁・富の両立どころか、先に富まし後で教化する「先富後仁」の青写真さえ持っていた(後述)。

他者の言説が混線の形で「孔孟之道」と誤認され、且つ孔・孟の理念の根底に繋がる別の例として、抗日戦争勝利の際の演説で敵への寛容を求める蒋介石が根拠に挙げた民族の高くて貴い徳性「不念旧惡」(旧惡を念わず)・「與人為善」(人に善を為す)は、後に「以德報怨」(徳を以て怨みに報いよ)に変形した事も挙げられる。儒教の美德として独り歩きた此の成句は、実は他者が孔子に当否を訊ねた見方だ。孔子の答え「以直報怨」(正直を以て怨みに報いよ)は、誠心誠意の応対だけでなく「以眼還眼、以牙還牙」(目には目を、歯には歯を)の含みも有る。其の「以德報怨・以直報怨」は其々、「量小非君子・無毒不丈夫」と対応する。

若き毛沢東の字・「詠芝」(「^{ヨンジ}潤芝・^{ルンジー}潤之」の語呂合わせ)は、「芝蘭生於深林、不以無人而不芳」(芝蘭が林の深い奥に生えるが、人が居ない為に芳香を持たぬ事は無い)の寓意⁴³⁾だ。長寿促進の薬草 靈芝と觀賞価値の高い蘭で道德や才能の優れた人に譬えるのは、如何にも中国的な繁・栄(繁盛・栄光)志向の発露だ。『孔子家語・在厄』此の成句は、孔子の「徳不孤、必有隣」(道德の持ち主は孤立に成らず、必ず隣人[理解者]が出来る)とも通じるが、土着性を貶す「山溝里的馬列主義者(山奥のマルクス-レーニン主義者)」の揶揄を逆手に取り、毛沢東は「山溝大学」の出身者と自称しただけに、此の山奥の陰翳に注目したい。

「先進」の語源と成る『論語・先進』の中で、孔子は門人の尊敬を得ない弟子・子路に就いて、「昇堂矣、未入於室」(堂には昇っており、ただ部屋には入っていない)と評した。終点ま

では後一步残しながらも相当な水準に達しているという弁護だが、其に由来した「昇堂入室」(堂に昇り室に入る)は、高明・正大な学徳 精微・深奥な学術という学問の境地の進化を表わす熟語だ。儒家や中国思想に対する多くの現代人の認識は此に即して思えば、「膚浅」(皮相)と言わずとも、表座敷の「堂」に止まり奥座敷の「室」には至っていない観が強い。

子貢の次の比喻には、孔子の門外不出の奥秘が出ている。「譬之宮墻，賜之墻也及肩，窺見室家之好。夫子之墻數仞，不得其門而入，不見宗廟之美，百官之富。」(屋敷の塀に譬えるなら、私の塀の方は肩に及び高さなので、室内の小綺麗な様子が窺えるが、先生の塀の方は数仞[1仞 7尺]も有るから、其の門を見付けて入らねば、宗廟の華美や官吏の富貴⁴⁴⁾は見えない。)自らの「身価」(沽券)を美玉に見立てて、売り出し方に就いて師の助言を乞ったのも子貢だ。彼が孔門の境地の奥底の「美・富」は、「顔如玉・黄金屋」と通じるが、仁と富(権勢)、功(名)と利は中国人の究極の価値追求と言える。

『神童詩・四喜』の「久旱逢甘雨，他郷遇故知，洞房華燭夜，金榜掛名時」(長い旱魃の後に慈雨が降り、異郷で故知に会い、新婚の寢室に華燭を点し、科挙の合格発表に名が出る)は、中国人の最高の幸福の集大成と言える。経営に於ける人間の動機付けや産業心理学に大きな影響を与えた米国心理学者・マズローの欲求階層説(1943)は、人間の基本的な願望を低次 高次の順で、生理的な欲求；安全への欲求；所属と愛情への欲求；自尊への欲求；自己実現の欲求と分類した⁴⁵⁾が、此の人生の4大快事も生存・安全本能に始まり、所属・愛情への期待を経て、理想・可能性の達成を極致とする。

「沽」(売る)の熟語の「待賈而沽」は褒・貶の両方に使え、「沽名釣誉」(名を売り譽れを求める)は悪い語義だが、売名と違って奨励される「争光」(栄光を勝ち取る事)の様に、名譽への堂々たる追求は中国では堂々と肯定される。名譽・声誉と声価・「身価」から、「生・声」と「命・名」の対を連想する。『名賢集』の「有銭便使用，死後一場空」(死後は全て無に成るから、金は有る内にさっさと使おう)には、『韓非子』に記された楊朱の「輕物重生」(物を軽んじ生を重じる)主義の投影が有る。左様な現世至上主義が庶民の間に根強い反面、「人過留名，雁過留声」(雁は通過し声を留め[るのと同様に]、人は通過して名を遺す)、「虎死留皮，人死留名」(虎は死して皮を留め、人は死して名を遺す)の理想も市民権を得ている。

(未完。以下次号)

[解題]

此の系列論文は、アジア政経学会西日本部会2001年度大会(6月23日、於大分・立命館アジア太平洋大学)文学・文化分科会で発表した同題の研究報告を肉付けした物である。大分に生まれ丸百年前に他界した思想家・教育家の福沢諭吉を引き合いに出し、西日本出身の数人の起業家の歩みから中・日・亜細亜の政治・経済の20・21世紀の道に思索を巡らすのは、言わば天

(時代や主題)・地・人3元の連環から触発された作業だ。

筆者の最近の系列論文は論旨・材料の豊富さを追求する為、「主線」(本筋)の傍らに「副線」(副次的な文脈)・伏線を貪欲に織り込む傾向が強かった。「紅花還須綠葉扶」(赤い花も緑の葉の引き立てが要る)、「牡丹雖好，全仗綠葉扶持」(牡丹は緑の葉が付き添ってこそ好い)と言う様に、枝葉の添加に由り本体を膨らませるのが中国流だが、此の論考では新世紀の新機軸への探求に相応しく、複線・多角・重層の志向を持ちつつ豊饒・洗練の両立を図りたい。主旨・要点をより鮮明にすべく、多くの事象や論評を注釈に入れた。故に注釈は本文とほぼ同じ量に成ったが、和声伴奏めく副論文として読まれたい。

(2001年7月4日記)

注

- 1) 熟語の「羽毛未豊」(羽が未だ十分に生えていない。若年や未熟で実力が不十分な事の譬え)や「翅膀長硬」(翅が硬く成る。一人前に成って自立する事の譬え)の様に、中国人は好く鳥獣の羽根の生え具合を人間の成長の見立てにする。胡耀邦が80年代中期の演説の中で使った「脱毛」(鳥獣が春・秋に毛が抜け換る事)の比喻も、自らの独立志向の隠喩の匂いがする。言葉尻を取る「文字獄」の悪習が残った其の後の胡耀邦批判でも此が罪名に成らなかったのは、実質的な脅威が無い事と共に中国語の隠微も一因か。
- 2) 多くの新語辞典に見当らず初出は判らなく、92年鄧小平南巡の後に蘇った語とする説も有る(天児慧他編『岩波現代中国事典』、岩波書店、1999、427頁)。80年代後期の流行を推定する根拠は、3年余ぶり復活した年初来の商売熱を論う88年8月4日『経済日報』の本紙評論員・馮並の『冷静評価第2次「経商熱」』だ。「工農兵学商，一起来経商」(労働者も農民も兵隊も知識人も商人も、一緒に商売に乗り出す)も、後に締め付けられ沈静化した84年前後の初回「経商熱」の中の流行語だ、と同文は言う。
- 3) 辞海編輯委員会編『辞海』(上海辞書出版社)1989年版では、「下海」(454頁)は「旧時戲劇界称非職業演員轉為職業演員」(旧時の演劇界で素人俳優がプロ俳優に成る事を称した)との一義だ。1999年版(488頁)では此の解は「旧時」を取ってと成り、「到海里去。如：下海捕魚」(海に出る。例：海に出て魚を捕る)、「指当娼妓或妓女第一次接客陪宿」(娼婦に成る事や娼婦が1回目に客を取る事を指す)、「指放棄原職業而從商」(本来の職業を放棄して商売に従事する事を指す)が添加された。この「捕魚」は鄧小平の「抓耗子」(鼠捕り)と結び付けば興味深い。が、余裕・余禄の「余」^{ユイ}との同音に因り縁起物とされる魚も、この利益追求と関わりを持つ。改革・開放後に売春も含む旧習が復活した(深圳経済特別区の資本主義化を見た古参の共産党員が衝撃の余り、「辛辛苦苦幾十年，一夜回到解放前」[数十年苦勞を尽くして頑張ってきたのに、一夜にして建国前に逆戻りした]と怨嗟を吐いた)事や、民衆が抱く商人の固定形象^{イメージ}に娼婦並みの非道徳・無節操が有る(俗諺に「無商不奸」[商人には狡賢くない者は居ない]と有る)事を考えれば、この「旧時」の削除やこの追加に隠れ味を感じる。
- 4) 熊忠武主編『当代中国流行語辞典』、吉林文史出版社、1992、433~434頁。建国後の約40年(1949~88)の流行語を網羅した此の文献では、此の語は1988年の部に入り、「人們戲称這一現象

為“各路精英，紛紛～”(人々は此の現象を“各方面の精英が続々と海に出る”とからかって呼んだ)と解された(文例の出所・年代不明)。「精英」の賛辞と「下海」の皮肉はちぐはぐの様だが、物凄い人材流入と海南島を舞台にした大型経済疑獄(84～85年、準経済特区の同島の開発の為に国家が与えた外貨管理上の輸入物資制限の緩和優遇を利用して、官民ぐるみで必要以上の物資を輸入し島外に転売し暴利を得た事件)の明・暗に妙に符合する。海南省設立決定の1年後の同じ4月中旬の胡耀邦の急逝が誘発した天安門事件でも、自他とも「精英」と認めた知識人たちが活躍したが、運動の挫折後「精英」は当局の揶揄と当事者の自嘲の対象と成った。

- 5) 俗称・「革命大串聯」は、各地間の紅衛兵同士の「経験大交流」だ。党中央・國務院の1966年9月5日の通達で、運賃・食費・宿賃の全額国費支出を宣言した。個人負担免除の支援策に促された活発化の結果、鉄道輸送と各地の社会生活が大混乱に陥った。上記機関は11月16日の通達で、暫く中止し翌年4月に再開する方針を打ち出した。結局、67年3、4月に引き続き見送る通告を2度出す破目と成った。其の喜劇は次の諸点に於いて、「文革」の実相や中国人の心性の絡繰を再現した。

毛沢東と極左派は「大鳴・大放(鳴・放=意見・異論の主張)・大字報(壁新聞)・大弁論」に次ぐ此の5番目の「大」を、国際共産主義運動史上の空前の試みとして自賛したが、革命の理想も遂に台所事情に勝てなかった。

採算無視の大盤振舞は毛の浪漫主義と共産党中国の全体主義の所産だが、原型なる若き毛の無銭旅行の「身無分文、心憂天下」(鏝一文も無いが、心に天下を憂慮する)の志は、「大串聯」の中盤以降は少数の者しか貫かなかった。物見遊山に化した実態と紅衛兵の俗物性を見抜いた周恩来は、祖国の素晴らしい山河を遊覧するのは好いが、全ての地方に批判対象が居るとは限らぬとし、移動を全て徒歩で行なうよう牽制したが、自腹が痛まぬ列車の利用を止める変化は出なかった。禁欲・自己犠牲の上に立つ原理主義が中国で成立し難いのは、此の様な苦行を嫌う現世享楽志向が要因か。『立命館言語文化研究』に連載中の拙論・『日本の中空・「頂空」(頂点の空虚)と中国的「中控・頂控」(中心・頂点に由る支配)』と関連するが、中国の強権統治は孫文が嘆いた中国人の「一盤散沙」(散り散りバラバラの砂)の裏返しだ。

曾て皇帝の言葉が「金言玉口」と言われた(此の熟語は本論考の財宝見立ての例なり得る)様に、領袖の決定は絶対的で撤回できぬとの固定観念が根強いだけに、再開の予告が御破算に成った結果は当局の信用失墜を意味する。毛はニクソンに対して自らの壮語や号令を「空砲」と自嘲し、此的一幕も実弾が尽きた故の「空砲」の破綻と観て能いが、錯誤に対する強制修正は権威の正当行使とも思える。浪費の膨脹に終止符を打つ決断は、孔子の「過則勿憚改」(過ちが有れば改正を憚るな)、孟子の「大人者、言不必信、行不必果」(大人たる者は、約束は必ずしも守らなくてもよく、行動は必ずしも果さなくてもよい)で正当化できるが、度重なる食言が招いた当局の公約への不信は後の「信仰危機」の一因だ。鼠が捕れるなら黒い猫も好いと言う鄧小平の論断は、正当な目的の為に手段を選ばぬ主義だが、其の清濁併せて呑む逆説は正論の部類には入らぬ。至上命題の社会安定の為に武力鎮圧の禁じ手を使った天安門事件の後の民心の離散は、黒い霸道・「詭道」の限界を示した。孔子は「民無信不立」(民衆の信任が無ければ国家は成り立たぬ)と断じた(『論語・顔淵』の此の5字語録は、上の句の「自古皆有死」と共に『名賢集』に出ている)が、中国語でも同音の「信・心」の維持こそ王道だ。「文革」後も当局の朝令暮改が繰り返され、政策変更を恐れる民衆は相場の波乱を懸念する日計り投資者の様に、刹那的な利益追求・確定に走りがちだ。其を防ぐ為の損失補填の空手形の類の弥縫策は

悪循環を加速するだけで、長期安定に不可欠な信任・權威の回復も「徳治」の課題に成ろう。

泡沫経済末期の日本の「ふるさと創生」支援は、金満の余裕を頼りに気前よく財富をばら撒く愚行として歴史に残ったが、国民総生産が負成長に突入して行く「文革」元年の無料・無量「串聯」は、無い袖を振る金欠国の気負いだから遥かに可笑しい。世界前の池田勇人は国民を甘やかした政治を自省したが、此の全額おんぶの様に毛沢東の甘やかし方も半端ではない。半面、為政者と民衆の相互利用の構図も見え隠れする。毛は紅衛兵を政争の点火役に利用し天下大乱の責任を政敵に転嫁し、周恩来は赤軍を気取る「徒步串聯長征隊」の出現を利用して列車乗用の中止を求め暴走の終息に仕向け、若者は千載一遇の好機を利用して社会・自然を「飽覽」し見聞を拡げた。

日本語に無い「飽覽」(飽きる程[目一杯]観る)が示唆する中国的な貪欲は、「文革」後の「世界大串聯」でも爆発した。「世界」を冠する此の新語の由来は、天安門事件の前年の報告文学(胡平・張勝友、『当代』1988年1号)の題だ。後に海外への出稼ぎを揶揄する流行語の「洋挿隊」も出たが、「挿隊」(人民公社の生産隊への編入)は毛が紅衛兵を切り捨て、「知識青年への再教育」の大義名分で農村に放り込む手段だった。20年後の「洋」(西洋。海外)への進出は、官民の相互信頼も相互利用も出来なくなった時代の出来事だ。「革命大串聯」の児戯と違って、自己責任を負う「洋串聯」は文字通りの「下海」と言えるが、泡沫経済の宴に耽りやがて物心とも萎縮して行く同時代の日本との対比は興味津々だ。

- 6) 侵略戦争を謝る田中首相の「多大な迷惑を掛けた」の中国語訳 「添了很大的麻煩」(「麻煩」=面倒)は、軽い言辞として周恩来の抗議を招いたが、周は「輕描淡写」(軽い表現で淡化すること)に由る「大事化小、小事化了」(大事を小事に化し、小事を了に化すこと)の名手だからこそ、激しく反応した節も有ろう。1967年2月、「文革」の極左路線に対する数人の老革命家の抗議が毛沢東の逆鱗に触れ、「二月逆流」と断罪されたが、彼は「二月的乱子」(二月のトラブル[騒ぎ])の言い回しで矮小化を図った(南山・南哲主編『周恩来生平』、吉林人民出版社、1997、1360頁)。今回の「動乱」「風波」の修正の経緯は霧に包まれる儘だが、最大限の軟化・糊塗に違いない。周の苦心は当時毛の威光と反対勢力の圧力に抗い切れなかったが、林彪事件後の毛は老革命家グループを活用する必要から、自ら謝り「逆流」の断罪を撤回した。89年の天安門事件は何れ前回(76年)と同様に否定されようとの観測が絶えないが、玉虫色の「風波」は当事者双方に居心地が悪くないだけに、皮肉にも再評価を遅くする公算が高い。

[補記：張良編『天安門文書』の日本語版(文芸春秋、2001)の記者・山田耕介は「後書き・解説」(477頁)の中で、中国語版(同年)の中の「学潮」は英語版(同年)で複数の訳者に由って、“Protest”と“student movement”と訳され、中国語版入手前に其に基づいて出来た日本語版では前者は「学潮」、後者は「学生運動」と訳した、と断った。「運動」は毛時代の後遺症で大衆を動員する政治運動の強い含みも有る、と言う中国人の教示も并記されたが、「運動」は共産党の用語として肯定的な響きも強い。一方の「学潮」は、勢いを強調する肯定的な意味も有り、一過性を見縊る冷笑的な用法も有るが、基本的には中性的な表現だ。武力鎮圧派も秘密会議等で此を使っていたとする当該文献が本物であるなら、本音を吐く際に型張った断罪語に拘らぬ姿勢が感じられるが、其れ以上の深読みは余り意味が無い。本論で問題にしたのは、事件後の公式論調でも敢えて断罪の意が殆ど無い「学潮」を選んだ懐柔の意図だ。]

- 7) 『辞海』の1989、99年版に見当らぬ「淡化」は、(a)上記註4文献；(b)李行健等主編『新詞新語詞典』(語文出版社、93)；(c)李達仁等主編『漢語新語詞典』(商務図書館、93)に拠ると、海水の

淡水化を指す原義から文学の新理論に転義(=実生活から遊離し人為的に物語や対立を造る創作方法に対して、作為を排除し自然化・生活化を目指す効果に言う[(b)80頁, 語釈「文学上的一种新理論, 是針對人為地編造情節、脫離生活、製造矛盾而提出的。即除去造作, 傲歸自然, 追求生活化的效果。」]、用例に「~主題」「~情節(=筋)」「~人物」等[(a)382頁]), 更に「強化」の対概念として一般化し、「使淡薄, 削弱或減少」(漸次[逐次]淡く薄くし, 弱化させ, 或いは減少させる。(c)85頁)の意に使う。

大東文化大学中国語大辞典編纂室(編集主幹・香坂順一)編『中国語大辞典』(角川書店, 95)の「淡化」(626頁)の語釈「(味・表現・対立した関係などを)やわらかくする。弱める。軟化させる」は妥当だが、文例と訳には異和を感じる。「~家庭 家庭の結び付きが希薄に成る」では自動詞と解したが、上記の(c)の語釈の「使~」(~させる)や(b)の「指削弱和降低作用」(働か[役割]を弱める, 引き下げる事を指す)の通り、此の言葉は他動詞であり、「~家庭」は家庭の重み・位置を下げる意が強い。次の「~当官心理 官僚主義を克服する」は二重の誤訳で、先ず「当官心理」は官僚に成りたい出世願望なのだ。此処の「淡化」は克服ならぬ抑制・希薄化を表わし、(a)の語釈の中の「不刻意追求」(敢えて苦心して追求せぬ)に近い。最後の「用浪漫手法將故事~ ロマンチズムによって物語をやわらかくする」も、味の淡泊化や作品の自然化の旨に照らせば典型例とは言え難い。90年代前後の此の国の最大・最新の中国語辞典だけに残念な水準だが、現代日本に於ける中国や中国語への理解の浅薄化・退化には似合う。

(a)の「~意識」(意識を弱める)の用例にも、「~“当官心理”」(『人民日報』1985年8月5日)が有る。「淡化」は此の文献で1985年の処に分類されたが、(c)に拠れば原義の科学用語は83年の文献に出ており、「浄化」と同じ常用語彙と見做す記述が86年に有った。(b)(c)の文例「必須防止~党的領導的傾向」(党的指導を弱める傾向は防げば成らぬ)、「党的觀念不能~」(党的觀念は希薄にしては成らぬ)の様に、政治の領分での応用は其の頃にも始まったが、90年代に為政者の立場から好く語られたのは「~矛盾」(対立を緩和する)だ。天安門事件後の対立は人為的に激化された側面が強く、其の緩和策として「淡化」が唱えられたわけだ。(c)の文例「由淡化到逐步消除“近親共事”這一社会現象」(内輪の仲良しグループが共に仕事するという社会現象を抑制し乃至逐次解消する)が示す様に、「淡化」は常に解消を最終目的とする。「政治風波」は(a)の語釈「不表現直白」(露骨に表現しない)の通りの「淡化」で、「淡忘」(風化。忘却)の狙いも感じ取れる。「動乱」が此に取って代られたのは鄧小平健在の90年代前期の事だが、其の頃の彼の統治手腕は息子・鄧朴方から「炉火純青」と形容された(ニューヨーク『世界日報』93年5月1日。楊炳章[ベンジャミン・ヤン]著/加藤千洋・優子訳『鄧小平 政治的伝記』, 朝日新聞社, 1999[原典=M. E. Sharpe, Inc, 1998], 第3章『垂簾の治者 富強中国の夢』の「6 名人の域に達する[1994-96年]」, 304頁より)。名人芸を言う此の熟語は完全燃焼の火の限り無く透明に近い淡い青に見立てた比喩だが、老子流の「為無為, 事無事, 味無味」(無為を為し[為とし], 無事[関わりぬ事]を事とし, 無味を味わう[味とす])に通じる「淡化」の自然体も、彼の「外儒内道」や「行方思円」(註37参照)の証だ。「淡」は『道德経』に2カ所しか無い(「兵者, 不祥之器, 非君子之器, 不得已而用之, 恬淡者為上」; 泰平に繋がる道の表出を形容する「淡乎其無味」)が、老子の神髄と言って能い。同書の「万物之母」に引っ掛けて言えば、鄧小平の母親の姓は奇しくも中国で珍しい「淡」だ。

- 8) 俱に「反右闘争」(1957)の標的と成った劉・陸・王・張は、其々1925・28・34・36年の生まれた。朱鎔基の年齢層(1928~)や「右派分子」にされた受難の経歴との符合が興味を引く。註

6の論評を補足すれば、「反右闘争」は陣頭指揮者・鄧小平の存命中、遂に完全否定に至らなかった。55万人余の「右派分子」の99%以上を冤罪と認定し、王蒙の文化相就任や朱鎔基の首相就任への道を開く一方、僅か一部の野党関係者等への断罪を維持し、当時の思想弾圧を正当化して譲らぬ鄧の姿勢は、体面に拘る意地を超えた施政の判断だ。其の無理気味の総論肯定・各論否定は、中国社会の建前と現実との必要な不条理の乖離の典型だ。今回の天安門事件に対する次世代体制の評価も、左様な苦肉の策を踏襲する先送りが予想される。

- 9) 胡耀邦の解任・劉賓雁の党籍剥奪が行われた1987年1月に執筆した『炉辺閑話：1986年小説品格批評』(『当代作家評論』1987年第2号)は、文末の「罷筆」(筆を擱く。筆を罷める)で屈折に表わした様に、同時代の中国文学に関する筆者の評論活動の絶筆宣言だ。同じ号に並んで掲載された文芸評論家・呉亮の論文は、新しい年の文学に薔薇色の見通しを示した。86年の百花斉放を考えれば不思議ではないが、ほぼ楽観論一色の空気は文学の繁栄が反落寸前の頂点に達した状況の現われた。
- 10) 巴金は「文革」を広島への核爆撃と同列にし、過ちを繰り返さぬ為「文革博物館」の設立を提言したが、黙殺の形で潰された。其の『“文革”博物館 随想録145』(1986)は、巴金『講真話的書』(四川文芸出版社、1990)に収録された際、目次に「(存目)」(目次に保存)の形を取り、当該箇所の1026頁は題のみ出て以下が真っ白だ。「政治風波」後の自粛と思われる其の処置にも、傷痕・商魂の重層が感じ取れる。被虐的な様に映る題名保留・本文削除は、武田泰淳が賛嘆した中華民族の「無抵抗の抵抗」(出所=註29)を秘める物だった。曾て国民党の規制に反発する進歩的な知識人は、検閲で削除された記事や文言の差し替えをせず、敢えて空白の穴が開く形で出版物を出した。俗に「開天窓」(天窓を開ける)と言う其の意地悪は、此の件も含めて天安門事件の前後に現われた。87年、劉賓雁論文を載せる『文学評論』(中国社会科学院[國務院直屬のシンクタンク]文学研究所の雑誌)が検閲に引っ掛かった際、当該頁を空白にする処置案が浮上した。国民党に対する共産党の嫌がらせ方で共産党を逆襲する気が、と上層部に一喝されて不発に終わったが、左様な反抗は年率20%台の通貨膨脹や国民党も踏み切れなかった大衆への発砲と合わせて、末期政権の様相の現われと観て能い。鄧小平が其の後改革・開放の梃子入れを急いだのは、解党・亡国の危機が背景に有る。其の効果は数年後現われたが、或る『文学評論』関係者が印刷済みの問題の号を密かに筆者に渡した時、気の無い手付きで劉論文の処に×を付けながら、10年後の評価は逆転するだろうと呟いた。癌の治療で入院した最晩年の周恩来は医療関係者に、私が死んだ後は写真の顔に×を付けたくないで欲しいと願った。極左勢力の誹謗に因る名誉失墜を想定した言葉だが、保身の為に不本意な罰印を付けざるを得ない一般人の立場への洞察は、此の一齣にも裏付けられた。自分の安全を確保した上で冤罪の人々を救う周に通じる様な、自身と活字の両方の保全を図る苦心、及び10年後を見通す視野が此の逸話の妙味だ。件の『“文革”博物館』の編集の仕方を通して考えれば、伝説的な「開天窓」の裏技の借用は意図の如何に関わらず、編者の将来の声価の向上に繋がり、奇貨可居の効果を狙う奇手にも成る。
- 11) 第1次安保闘争と第2次天安門事件の間に、幾つかの時期の暗合が見られる。前者の導火線は5月20日の自民党単独に由る衆議院の新安保条約の可決で、後者の戒厳令発布も5月20日だ。前者の安保改定阻止第1次実力行使(全国で560万人参加)は、後者の武力鎮圧と同じ6月4日の事だ。全学連主流派が国会に突入し警察との激突で女子大生が死亡した事件(6月15日)の後、7月の岸内閣総辞職・池田内閣誕生を経て、12月27日の閣議は「国民所得倍増を目標とする長期経済計画」(経済審議会11月1日答申)を了承した。一方、89年の天安門事件後、6月に江沢民政

権が誕生し、11月に鄧小平が完全引退を宣言し、92年1月に鄧は改革・開放を促す為に南方を視察した。

- 12) 「岸内閣に代って成立した池田内閣は、所得倍増というバラ色の夢を掲げて人心を取り戻そうとした。それは“政治の季節”から“経済の季節”への転換を図ろうとするものだった。総選挙の最中に答申が出たのも、選挙の争点を経済政策にすり替えようとするこの計画の真の目的を暗示している。」(宇野俊一他編『日本全史』、講談社、1991、1120頁)
- 13) 1982年の中共第12期全国代表大会は、1980～20世紀末の国民総生産「翻兩番」(3倍増)計画を打ち出し、87年の13期大会は更に「三步走」(3段階構え)構想を提起した。第1段階の目標は80年代末までのGNPの倍増、「温飽(衣食)問題」の基本的な解決であり、前者は88年で2年繰り上げて実現した。第2段階の目標は90年代を通してのGNPの更なる倍増、国民生活の「小康水平」(まずまずの水準)の実現であり、前者は国民経済・社会発展第8次5ヵ年・10ヵ年計画(91年)の上方修正で97年に繰り上げられ、実際は96年頃にほぼ達成した。21世紀の中葉までにGNPの中進国水準の達成、比較的豊かな国民生活の実現を目指す第3段階は、既に始まっている。

此の論考の主旨に即して考えれば、一連の経緯の次の諸点が目を引く。

其々鄧・胡耀邦、鄧・趙紫陽体制の発足(80年末、87年初)の直後に、鄧の意向を受けた2回の構想提起は、中共の信任危機の克服と新体制の基盤強化の狙いを秘めた。

鄧は自分の権力・路線への脅威を感じて胡を斬ったが、8ヵ月後の党大会で打ち出す経済発展の目標を堅持した点で、意識形態一本槍の左派と一線を劃す複眼が見られる。

期間中の各年度国内総生産(GDP)成長率(80年=7.8%;81年=5.2%;82年=9.1%;83年=10.9%;84年=15.2%;85年=13.5%;86年=8.5%;87年=11.6%;88年=11.3%;89年=4.1%;90年=3.8%;91年=9.2%;92年=14.2%;93年=13.5%;94年=12.6%;95年=10.5%;96年=9.6%;97年=8.8%;98年=7.8%;99年=7.1%[出所=国家統計局編『中国統計年鑑』、中国統計出版社])から、経済成長と共産党への国民支持度との相関、政治規制と経済成長との逆相関が窺える。鄧が84年の建国祝典で大衆の衷心の歓迎を受け、92年「南巡」後に人気を取り戻したのは、長足の経済向上に負う処が大きい。

80、90年代のGDP成長平均年率は其々9.72%と9.71%で、波動の凹凸を超えた均整は中国の歴史発展の息の長さ、「放+収」(緩和・加速+緊縮・調整)の操作の効果を感じさせる。鄧が「第2歩」の繰り上げ完了後に逝った事は、負の精神遺産を残した毛と逆に物的な財富を遺した貢献の象徴だが、彼の逝去と香港返還が有った97年以降の減速は時代の転換に相応しい。複利増殖の「72の法則」($72 \div \text{金利}[\text{通増年率}] = \text{元本倍増に掛かる年数}$)に当て嵌めれば、数年来の7～8%の成長率は正に10年で倍増の標準的な速度だ。東京五輪前後の日本も此の速度に落ちていたが、北京五輪の決定～開催(2001～08)前後の中国も、此の調子で安定社会へと脱皮しつつあろう。

「もはや戦後ではない」1956年からの20年間、日本の国内総生産(実質)対前年増加率は、56年=6.3%;57年=7.5%;58年=6.3%;59年=8.6%;60年=11.5%;61年=10.3%;62年=6.7%;63年=7.8%;64年=9.6%;65年=5.3%;66年=9.9%;67年=10.7%;68年=10.8%;69年=11.9%;70年=10.4%;71年=4.7%;72年=8.7%;73年=8.3%;74年=-1.7%;75年=2.5%だ(経済企画庁経済研究所編『長期選及主要系列 国民経済計算報告』、大蔵省印刷局、1991、442～446頁)。前と次の10年の其々の平均値 8%と7.6%は、やはり各年間の乖

離を超えた見事な平準化だ。20年の平均値(7.8%)が7%台に収斂したのは、東京五輪前後の日本経済と北京五輪前後の中国経済の類似性や、安定的な高成長速度の普遍的な相場を示唆する事か。統計方法等の違いで同じ指標でも単純比較は難しいが、中国は1953年以降の半世紀に亘って、通算ベースで東京五輪前後の日本経済の成長速度を保って来ており、更に暫く維持して行きそうだと考えられる。

馬立三『中国経済がわかる事典 改革・開放のなかみを読む』に拠ると、「建国後の復興期が終わった53~94年の間、国内総生産の年平均成長率は7.3%と推定されている」(ダイヤモンド社、1995、12頁)。「72の法則」で単純化すれば、10年単位の倍々ゲームが数十年も続いた計算に成る。社会学者の金観涛・劉青峰夫婦は『歴史の表象の背後に 中国社会の超安定構造の探求』(四川人民出版社、1983)の中で、停滞と反乱に因る王朝の周期的な交替を超えた中国封建社会の長期的な持続の法則を分析したが、此の平準化した数値も体制の変動に関わらぬ超安定構造の経済面の裏付けか。

半面、同時期の年平均経済成長率(78年の前と後は其々国民収入指数とGDP指数)の推移
53~60年 = 9% ; 61~70年 = 4% ; 71~78年 = 5.5% ; 79~94年 = 9.4% (同上。出所 = 『中国経済年鑑』94年版、『中国統計摘要』95年版)は、各時期の浮沈の大きさを如実に示す。国家運営の巧拙と連動する劇的な変化を物語る様に、天災・人災に因る「3年経済困難」や「文革」が続いた1961~78年の加重平均の4.6%は、53~60年及び79~94年の同9.2%の恰度半分に当る。上記の同時期日本の経済成長率に比べても、「失われた10年」の非道さが判る。一方、50年代と改革・開放期の9%台の合致は、56年体制と78年体制の非連続の連続の証だ。

2000年、第9期全国人民代表大会が承認した国民経済・社会発展第10次5ヵ年計画は、同年~2010年までのGDP倍増を目指して期間中の経済成長率を7%前後とした。例の国民所得倍増計画の様な中期構想が消え、単年度主義が顕著な昨今の日本経済に対して、共産党中国は建国以来の国民経済5ヵ年計画の他、91年から上記の10ヵ年計画も導入した。建国百年(2149)を目的地とする「第3歩」は中国らしい気宇壮大な物だが、第1、2段階の繰り上げ実現が証した通り具体性と勝算が有る。同じ91年に泡沫経済が崩壊した日本では、対照的に国家戦略不在の儘の迷走が続いて来た。

因みに、次の日本のGNP(1970~80年はGDP)成長率の起伏にも、戦争・不況の爪痕や昇龍の盛衰の足跡が鮮明に見て取れる：1913~29年 = 3.9% ; 29~50年 = 0.6% ; 50~60年 = 8.2% ; 60~70年 = 11.1% ; 70~80年 = 4.9% (小松左京・堺屋太一・立花隆編『20世紀全記録 1900-1986』、講談社、1987年、1312頁。原典 = 1960年代までは《Historical Statistics of the United States》、其以降は《Statistics Abstract of the United States》[1986年])

- 14) 第8期全国代表大会(1956)で確立した中共の最高指導部は、主席 = 毛沢東、副主席 = 劉少奇・周恩来・朱徳・陳雲、総書記 = 鄧小平だ。此の6人から成る政治局常務委員会に、同じ55年に政治局委員に選出された林彪より鄧が一足早く入った躍進は、韓文甫『鄧小平伝・革命篇』(台湾・時報出版文化企業有限公司、1993)第16章・「鄧小平在“高饒事件”中得益」の指摘の通り、高崗・饒漱石肅清(1954)での手柄が大きい。此の著書の原型・『鄧小平評伝』(香港・東西文化事業公司、1984、88新版)を基にした寒山碧(韓の筆名)著・伊藤潔訳編『鄧小平伝』(中公新書、1988)では、事件の処理を通じて事務と組織能力に長じるとの評価が一層強まったと記される(52頁)。「鄧小平伝・革命篇」の「組織才幹」(245頁)と若干ずれるが、52年に副総理に就任し、翌年に財政相を兼任し党中央秘書長(幹事長)の儘で中央組織部長を兼任した鄧の経歴を

観ても、其の政・党の職務は正に実務・統率能力を高度に要す物と言える。彼が重宝された事は究極の処、中国に於ける実務家・統率者への需要の高さを示す。経済の大御所・陳雲のNo. 5の位置は、建国初期の「経済戦線」の優位の証だ。58年に林彪が副主席・常務委員に抜擢された事は、政治・軍事へ傾斜する動意の現われで、其の布石は56年体制解体の時限爆弾に成った。

- 15) 1973年、鄧が6年余ぶり復活し国宴（国賓を^{もてな}す国家主催の宴会）に姿を現わし内外を驚かせた。「副総理」の職を剥奪されていなかった事が、此の席で初めて判明したのである。なるほど同じ失脚でも、鄧の処遇が他の指導者と違って不思議ではない」と寒山碧は観た（伊藤潔訳編『鄧小平伝』[註14参照]、112頁。韓文甫『鄧小平伝・治国篇』[出版社・刊行年代=註14既出『革命篇』]の該当箇所[477頁]には、其の記述の代りに、此は彼の唯一正式に剥奪されなかった職位だと書かれた）。劉少奇も国家主席の職位を持つ儘監禁されたので、「無法無天」の超法規的な現象とも解せるが、毛が鄧を一貫して特別視したらしい事は寒山碧が言う通りで、此の論考で後に其の要因なる毛の人材観に迫りたい。
- 16) 「儒商」は『辞海』の1989, 99年版は勿論、註4, 7で引いた流行語・新語辞典にも無く、其ほど歴史が浅く定義も曖昧だ。天安門事件前に流行った確証は見当らぬが、90年代の前半に広く流布したのは確かだ。賀雄飛主編『儒商時代 中国人的第5次発財機遇（儒商の時代 中国人の5回目の金儲けの機会）』（遠方出版社、1996）でも、語源が不明とされるが、此の新概念の誕生の背景と中身に就いて後に詳解したい。
- 17) 色々な形で語られた此の命題の詳説は、渋沢栄一『論語と算盤』（東亜堂書房、1916 [直近の刊本=国書刊行会・大和出版、1985]）だ。
- 18) 竹内実『文化問題としての日中関係』、竹内実編『日中国交基本文献』下巻、蒼蒼社、1993年、328頁。
- 19) 幸田露伴『潮待ち草』（1905）「46 諺」・「47 支那の諺」（蝸牛会編『露伴全集』、31巻、1956、156~162、162~170頁）。「基督教の金粉銀粉を以て塗抹せられたる幾幅の大写真画よりも如何にも有力なる」、「真情真態」・「国民の性質習慣及び社会組織の実相を示す」「小写真画」として例示された中国の諺は、「錢是力也」「錢是人之胆」だ。「48 元の時の諺」（同171~180頁）の中で講釈した「不_レ受_レ苦中苦_レ、難_レ為_レ人上人_レ」、「十年窓下無_レ人聞_レ、一挙成_レ名天下知_レ」、「是非只為_レ多閑_レ口、煩惱皆因_レ強出_レ頭_レ」、「人無_レ千日好_レ、花無_レ百日紅_レ」、「養_レ兒代_レ老、積_レ穀防_レ飢」等の数々の諺は、此の論考で取り上げた児童啓蒙教材に入る。
- 20) 『辞海』1989年版（45頁）、99年版（48頁）では、「中国旧時的蒙学課本」（中国の旧時の啓蒙教育教材）で、内容は道德教育に重みを置く；宋の（学者）王应麟（一説に区適子）が著したと伝えられ、明・清の学者の断続的な補足を経て、1928年、革命家・思想家の章炳麟（太炎）が再訂した；3言韻文で暗記し易く、後に種々の『三字経』の名が付く教材が有る、と解された。99年版で「革命家・思想家」が消え、「側重道德教育」「便於背誦」が追加されたのは、^{イデオロギー}觀念形態「淡化」の時流と道德教育普及の動きを映す改訂だ。
- 21) 中国の旧時の啓蒙教育教材・『千字文』は、南朝・梁の周興嗣が王羲之の遺書から其々違う千字を取って編撰し、自然・社会・歴史・倫理・教育等の知識を述べるた4言韻文だ。隋から流行し始め、続編・改編版が多数有る。（『辞海』99年版328頁）
- 22) 撰者未詳の『名賢集』は南宋以降の儒学者が編集した物と見られ、孔子・孟子等の先賢の語録や処世・修身等に関する民間の格言から成る4, 5, 7言韻文だ（夏初・恵玲校訳『蒙学十篇』[北京師範大学出版社、1990]に拠る）。次の『弟子規』『小兒語』『增広賢文』と共に『辞海』

- 1989, 99年版に出ないのは、正統な『三字経』『千字文』と違う傍流の性質の証だ。
- 23) [清]李毓秀撰集『訓蒙文』を賈有訓が修訂・改称した『弟子規』は、『論語』『孟子』『礼記』『孝経』や朱子等の語録を集め、学徒規則の形式を取った学習指導・道徳修養の教材で、影響力は一時同じ3言韻文の『三字経』を上回る程だった(同上)。
- 24) 『辞海』1999年版の「神童詩」の解は、「別名・『幼学詩』。中国の旧時の啓蒙教育教材。北宋汪洙撰。内容の大半は勉学・出世に対する称賛だ。初めは僅か56首で、全て汪洙の創作ではない。後に数千首にまで増補され、皆他者の作品を採り交じって敷衍した物。巷に刻本(民間の書店から刊行した書物)が非常に広く流布した」と言う(4513頁)。89年版に無く99年版に追加した事は、同書の『三字経』『千字文』に敵わぬながら絶大な影響度の証と共に、90年代の出世欲の高揚を物語る現象か。他者の作品に対する「雑採」で56首から数千首まで膨らんだのは、時代を超える共鳴の強さを窺わせ、中国の伝説の形成の典型とも言える。註22文献では本体の34首+巻首の28首と成り、宋の大学士・汪洙や南朝陳国の末代皇帝・陳叔宝、李白等の詩の寄せ集めと解された。
- 25) 『小児語』は明の呂得勝・呂坤父子が編纂した倫理教育の格言・警句集で、4言・6言韻文が主と成る(同註22)。
- 26) 『増広賢文』(全称・『増広昔時賢文』)は編者未詳で、明・清に流行した(同上)。
- 27) 『辞海』の「楊朱」の解に抛ると、楊朱の学説は戦国初期に流行したが、本人は著書を遺さず、『孟子』『莊子』『韓非子』『呂氏春秋』等に史料が散見される程度で、『列子』の中の『楊朱篇』も必ずしも信頼できず、晋の人に由る偽作の説も有る(1999年版, 3570頁)。楊朱著書抹殺説は筆者の単なる直観だが、唯我主義や現世享楽願望を露骨に宣揚する『楊朱篇』が『列子』の8篇(『天瑞第1』『黄帝第2』『周穆王第3』『仲尼第4』『湯問第5』『力命第6』『楊朱第7』『説符第8』)の1つとして長く伝わって来た事は、著者の真偽はともかく楊朱の生命力の現われだ。20世紀前半の李宗吾の「厚黒学」が90年代前期に再び流行した事(後述)は其と二重写しの様に、中国的な「大快楽主義」(後述)の広い「市場」(市民権)を思い知らせる(「市場」が市民権を表わす処も中国人の商人的な気質[後述]の証)。
- 28) 次の段落の中の引用を例に拾うと、「人為財死、鳥為食亡」は俗語であり、『名賢集』で其の直ぐ後に出る「得人一馬、還人一牛」は、唐の『太公家教』の「得人一馬、還人一牛。往而不来、非成礼也」が出典だ。
- 29) 武田泰淳『滅亡について』(『花』第8号, 1948), 『新編 人間・文学・歴史』(築摩書房, 1966), 9頁。
- 30) 此の熟語は『広辞苑』の解で、「遠大な望みを持つ者は小さな利益などを顧みないから、欲が無いように見える。大欲の者はとかく欲の為に心がくらんで損を招き易く、結局は無欲と同様の結果に成る」との両義を持つ。後者の古例は『徒然草』の「究竟は理即到に等し。 - 」で、出所不明の前者は中国の文献には見当たらないが、両方とも中国の発想に合う。
- 31) 「陰陽魚」は宋の頃に現われた太極図の俗称。S状曲線で分けた左右が魚(胎児や雲気の説も有る)の形を成し、陰陽の相互内包の表徴として白・黒の半分の中に其々反対側の色の小さい円(目玉)が含まれる。
- 32) 註4文献で1979年の部に入る「一切向前看」は、79~80年に多用され、「文革」の怨念から脱却する建設的な態度が原義で、「文革」批判を嫌う保守派にも利用された(308~309頁)。同音の「一切向前看」は出所不明だが、流行が其の直後の事と思われる。同文献の1983年の部に、「抬頭

向前看, 低頭向錢看。只有向錢看, 才能向前看。」(仰向いて前を看, 俯いて金を看る。金を見てこそ, 前向きが出来る。) と有る。共産主義の理想へ向いながら現実にも正視すべきで, 現実的な利益を積み重ねてこそ歴史の進歩を加速し, 人類の理想の実現を早める事が出来る, という主旨の此の俗諺は批判された(365頁)。「一切向前看」の正論が政治的に悪用された事と通じるが, 金銭一辺倒の「一切向錢看」ならぬ「抬頭向前看, 低頭向錢看」は, 一刀両断で白黒を付け切るのが難しい。体制の標語が^{スローガン}屢々こんな戯れ詞に改編される現象は, 中国社会の表裏両面や「上有政策, 下有对策」(上に政策有り, 下に対策有る) と言う民衆の強さを映す。影の添加に由って筋を膨らませる大衆文芸の常套や対の発想の習性は此処にも現われるが, 李白『静夜思』の「拳頭望明月, 低頭思故郷」を擬^{もじ}った処も妙味だ。

33) 発案者と初出は定かでないが, 『辞海』1989年では中国共産党が11期3中総会(1978) 後に提起し, 香港・澳門問題の解決(同84, 87) に寄与したと解し(8頁), 99年版では同じ「一国両制」の項で鄧小平に由る構想とし, 新設の「一個国家, 兩種制度」の項(= 1国2制度。 = 鄧小平の1984年の談話の題) の中でも同じ主張をした。

34) 36) 駒田信二『対の思想 あるいは影の部分について』, 『対の思想 中国文学と日本文学』(勁草書房, 1969) 所収, 19頁。

35) 1990年代中期, 囲碁棋士・小川誠子(当時5段) の指摘。

37) 佐々淳行『危機管理のノウハウPART1』(PHP文庫, 1984) 第3章・「交渉力」に, 「外儒内道 中国式本音と建前」の1節が有る。警察官僚の著者が「文革」中に領事として香港に出向した頃, 元国民党將軍から伝統的な「中国式のノウ・バット」交渉術を教わった。相手は「外儒内道」と書き(著者は「(Wai Ju Nei Tao = ワイルー・ネエイタオ) 」の発音表記を付けたが, 第2, 4字の「漢語拼音」[現代漢語の発音標記] は其々Ru, Daoが正しい), 「英語で言えば“ Square outside, Round inside (外方内円) ” とでも言うかな」と付け加えた。(167頁) 中国の辞書には「外方内円」は見当らぬが, 韓文甫が鄧小平の特質を言う「行方思円」(出所同註14, 15頁) と共に, 此の論考の主旨の鍵言葉たり得る(後述)。

38) 1929年, 赤軍第4軍の指導部から外された毛は憂鬱の故に胃腸を患い, 「楊引之」の仮名で田舎に静養した。「楊」は遠隔地に居る愛妻・楊開慧への眷恋の発露で, 「引」は「隠」に通じ抗議の為の引退・隠退の意志表示だ, との講釈が有る(出所同註43, 9頁)。楊は翌年に国民党に処刑されたが, 毛は彼女の戦死説を信じて28年から賀子珍と同棲を始めた(曉峰・明軍主編『毛沢東之謎』, 中国人民大学出版社, 1992, 142頁) から, 疑わしい感じもするが, 毛が賀に次ぐ3番目の夫人・江青の嫉妬を無視して, 『蝶恋花・答李淑一』(1957) の中で楊を偲んだ事からすれば, 有り得る未練とも思える。其の寓意が真実であるなら, 現代社会の病理と同じ失意に因る胃腸の不調と共に人間臭さを感じるが, 「楊・揚」の相関に注目したい。上記の詞の冒頭の「我失驕楊君失柳」(我は驕楊を失ひ君は柳を失う。竹内実訳[武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』, 文芸春秋新社, 1965, 304頁], 以下同) は, 亡妻と古き戦友・柳直荀(李淑一の亡夫) に対する痛惜だ(『詩刊』誌[詩刊社, 中国作家協会主管] は58年1月号に掲載する際に江青への配慮からか, 「編者註」の中で“ 驕楊 ” 是指楊開慧烈士とし, 毛との関係に就いての明言を避けた) 。次の「楊柳輕颺直上重宵九」(楊柳輕く颺り直ちに重き宵の九に上る) は, 故人の昇天を理想化した句だが, 「颺」は「揚」と同音で「飄揚」の意(中共中央文献研究室編『毛沢東詩詞集』[中央文献出版社, 1996] の語釈[102頁]) だ。人の姓と樹の名に引っかけた「楊柳」も楊樹の姿に似合う「輕揚」も漢語の奥妙の所産だが, 「楊引之」の裏の「隠」の更なる裏に有る「飄揚」の

飄逸・高揚は、「以退為進」(退を以て進と為す)の韜晦の指向性か。

- 39) 先秦～明の名文222篇を収録した旧時の啓蒙読本・『古文觀止』([清] 吳楚材・吳調侯編)にも入る蘇軾の『賈誼論』には、孔・孟の政治関与の意欲を窺わせる逸話が有る。曰く、聖人・孔子は方々遊説し余程非道い国でない限り自分の理想を実行させるべく極力助言し、楚に赴く前に弟子の冉求を打診させ子夏に意見の開陳に行かせた。孟子は斉を去る際に国境の宿に3泊し斉王の呼び戻しを待ち、今の世の中は王道を行なうには自分を除けば誰が出来ようと語った。召還への期待が外れた孟子は「方今天下、捨我其誰哉？」に続いて、(其の重みを持つ自分は此の程度の事で)不愉快には成るまいと付け加えたが、「君子之愛其身、如此其至也」(其の身を自愛する君子は此程周到なのだ)と言う蘇軾の論評は、身を天下・国家への寄与の本とする価値観の所産だ。因みに、上記の孔子の行動に対する蘇軾の論評は、「君子之欲得其君如此其勤也」(君の信任を得ようとする君子は此程勤めるのだ)と言う。
- 40) 「苟為後義而先利、不奪不鑿」(仮に義を後回しにし利を優先するなら、何でも奪ってしまわないと満足できぬ事に成る。)
- 41) 「陽貨欲見孔子、孔子不見、歸孔子豚。孔子時其亡也、而往拜之。」
- 42) 後に詳解する『論語・先進』の「季氏富於周公、而求也為之聚斂而附益之。子曰：“非吾徒也、小子鳴鼓而攻之、可也。”」は、孔子の最も激烈な糾弾に数えられる。季氏の対外侵略への憂慮を吐露する「季氏」篇の冒頭の言説は、通常の語録の10倍前後に当る277字で、『論語』の2番目に成る文の長さは、孔子の懸念の程を窺わせる。
- 43) 尹高朝編著『毛沢東の老師們』、甘肅人民出版社、1996、8頁。
- 44) 楊伯峻は『論語語註』(中華書局、1980)の中で、「百官之富」を「房舍の多種多様」(房舍の多種多様)と現代語に訳し、俞樾『群經平議』巻3と遇夫先生『積微居小学金石論叢』巻1の説を基に、「官」は房舍が原義で官職が転義なので、此处で房舍をも指すとした(204～205頁)。其の結論は傍点が表示様に他の解釈を排除しないが、孔門の「学而優則仕」の伝統等とも併せ考えて通説に従った。
- 45) 小川一夫監修『改訂新版 社会心理学用語辞典』、北大路書房、1995、339頁。

“儒商·德治”之道：以理、礼、力、利為軸心的 中国政治之統治文化（1）

本論文以反映中国近10多年来時代精神的“儒商”，及指明新世紀方向的“德治”為關鍵語彙，探索以理、礼、力、利為軸心的中国政治之統治文化原理。

本部分在把握近代以来日、中之間約30年的發展差距的前提下，審視戰後、第1次反安保闘争後的日本和“文革”後、天安門事件後的中国之共同趨勢——由政治向經濟的價值取向重点轉移。將“下海”熱中出現的“儒商”概念，作為改革、開放時代的《論語》与“算盤”結合的新生面加以肯定，並進一步發掘《論語》內藏的“算盤”。通過分析对中国人精神形成給予極大影響的旧蒙学課本的教示，發現中国式思考、志向的陰陽混成的“糾纏”構造，展示儒教及中国的理念、情念的多元、多樣、多角、多彩、多岐的複雜系統。

（XIA, Gang 本学部教授）